



実力主義に拾われた鑑定士 1
奴隷扱いだった母国を捨てて、
敵国の英雄はじめました

ALPHAPOLIS

薄味メロン

usuazimeron

アルファライト文庫 

ルルベール

✦
ろうりん ごうき
老練で豪気な帝国軍
少佐。厳しくも温かい目で
アルトたちを見守る。

マイロ

✦
マルリアの弟。素直に
なれない姉を献身的に
サポートする。

ルドルフ

✦
やわ
物腰柔らかな帝国軍
少佐。アルトの才能と
実力に期待を寄せる。

MAIN CHARACTER

🔍 主な登場人物

フィオラン

✦
どこか残念な冒険者のお姉さん。実は弓術の才能を秘めている。

マルリア

✦
ツンデレな訓練候補生。
成績優秀で、アルトを
ライバル視する。

リリ

✦
つう
羊の角と尻尾を持つ、
心優しい少女。
アルトに支援魔法の
素質を見出される。

アルト

✦
本作の主人公。
敵国である帝国軍人に
鑑定魔法の才能を認められて
亡命し、将軍候補としての
第二の人生を送る。

プロローグ 運命の出会い

「おい平民！ 物品鑑定かんていのノルマを千個追加だ！ 明日までに終わらせろ！」
「なっ——!?」

ドラムド王国のとある倉庫で働いている、しがない鑑定士である俺——アルトに、貴族の上司が理不尽りふじんに怒鳴どなっていた。

「ちょっと待ってください！ 俺の魔力量じゃ千個も鑑定なんて——」

「うるせえ!! お前みたいなヤツでも、グラウス帝国の連中と戦争が近いのは知ってるんだろ!? 知ってるよな!? お前は榮えあるドラムド王国の一員だもんな!？」

「……はい。知っています」

確かにこのクソ上司の言う通り、隣国りんこくのグラウス帝国との戦争が間近まぢかに迫せまっている。

理由はよく知らないが、ドラムド王国が一方的に宣戦布告をしたらしい。どうせ偉い連中同士が金や物資や土地の利権なんかで揉めたのだろう。貴族じゃない俺には関係ないことだ。

「だったらキリキリ働け、平民!!」

クソ上司は吐き捨てるように怒鳴りつけて、バタン！とポロポロのドアを閉めた。上司の足音が遠ざかっていく。追加のノルマを運んでくる平民を探しに行つたのだろう。すきま風が吹き抜ける倉庫に俺一人。周囲には、鑑定されるのを待っている品々の山。「これに追加で、千個……」

どう考えても無理だ。魔力を極限まで絞って鑑定魔法を使ったとしても、一日に九百個が限界。それ以上は、魔力が尽きて死にかねない。だけど、終わらなかつたら、給料なしで飯抜き。

目の前にあるのは使い道のよく分からない部品や謎のアイテムばかりだ。クソ上司が競争に言及したつてことは、軍事関連の品だろう。適当にやつたり、鑑定したと嘘をついたりすると、バレた時に戦犯扱いになる。そうなればさすがに処刑だ。

「終わらせる以外に、生き残る道はない、か……」

蜘蛛の巣が張る天井を見上げながら、俺はそう呟いた。

ドラムド王国は貴族主義こそが至上とされている国だ。平民は一生奴隷まがいの扱いを受け、貴族のために命をかけて働き、血税を納め続けるしかない。

いつもより頭痛がひどい。ずっと視界が揺れている。だけど、目眩が、なんて言っている状況じゃない。

「これが俺の仕事だから……」

はあ……と大きな溜め息をこぼして、背筋を伸ばす。

俺はベシン！と強く自分の頬を叩き、その痛みで意識を保ちながら、鑑定待ちの物品の山に手を伸ばした。

——その時。

「やめた方がいい」

不意に、何者かに後ろから手を掴まれた。

「なっ!？」

「これ以上鑑定魔法を使ったら、魔力切れを起こしてキミの命に関わる」

背後に人がいる!？ こいつ、いつの間……!？」

振り払いながら叫ぼうとしたが、その前に手で口を塞がれてしまった。

「暴れないでくれ。これは、キミのためでもあるんだ」

落ち着いた調子の、男の声だった。

こいつは、いったい……

「キミの実力は見させてもらった。帝国に来ないか?」

俺の実力? ていこく? なんの話だ?

何がなんだか分からない俺に、男はなおも言葉が続ける。

「我々の国は、常に実力のある者を求めている。キミなら金持ちに——この国で言うところ

ろの貴族になれると僕は思っているよ」

貴族になれる？ 平民の俺が？ 本当に意味が分からないのだが……

「混乱させてしまつて申し訳ない。これから手を放すが、暴れないと約束できるか？」

口を塞がれて言葉を発せないため、コクリと首を縦に振る。

ゴツゴツとした男の手が、俺の口元からゆつくりと離れていった。

「振り返らないでくれ、いいな？」

「……分かりました」

背後を確かめたい気持ちはあるが、不要な動きはしない。いつ死んでもおかしくないほどの激務をさせられてはいるが、死にたいわけじゃないからな。

今はそんなことよりも、情報収集が先だろう。

「俺が貴族になれるというのは、どういう意味でしょうか？」

「言葉通りの意味だよ。我々の国は実力主義だ。生まれや身分に関係なく、実力があれば出世できる。キミが望みさえすれば、相応の地位を手に入れることができるだろう」

実力主義？ 我々の国？ 出世？

これはあれか？ クソ上司が考えた新手の業務妨害か？ 貴族様お得意のお遊びか？

その可能性は高いが、俺の困った顔が見られる正面の特等席には鑑定品の山があるだけで、誰もいないように見える。

背後にいる男の物腰からも、貴族特有の傲慢さを感じない。

……ダメだな。悩むにしても、情報が少なすぎる。このあとの仕事に備えて魔力の節約をしたかったが、仕方がないか。

俺はできるだけ魔力を細くして、背後にいる男の足元に流した。自分の魔力を対象に流すことで、鑑定魔法を発動できるのだ。

すると、俺にしか見えない鑑定結果の画面が眼前に表示される。

【名前】アルズ・ベラルト(31歳)

【職業】帝国軍士官…5/11(少佐)

【技術】剣術…24/40 潜入…40/40

「なっ——!?!」

——いや、ちょっと待て！ 帝国軍士官!?

ていこくに来ないか？ つてのは、グラウス帝国のことか!?

どうして敵対している国——それも、こちらが一方的に宣戦布告をしたせいで、戦争まで秒読みとなっている国の人間が、ここに!?

能力を見る限り、どうやらこの男は諜報員で間違いなさそうだが……潜入の技術がレベ

ル40って相当な実力者だぞ!?

俺は震えた声で問いかける。

「……俺を、殺す、つもりですか?」

「いや、それはないな。もしそうなら、声なんてかけていない。ただ、一つ聞きたいんだが。僕に何かしたか?」

—— なっ、バレた!?

「すみません! いつもの癖で鑑定を……」

「鑑定? ……キミは、人の鑑定ができるのか!」

「……? ええ、できますよ。俺は鑑定士ですから」

男はなぜか、俺が人間を鑑定したことに驚いたようだった。

というか、初めて鑑定したことに気付かれたな。違和感程度、と言った雰囲気だが、俺から流れ出る微量の魔力を感じた、ってことだろ? 今までバレたことなんてなかったのにな……

いや、そんなことより余計な動きをしたと気付かれたのはやばい! 俺なんかじゃ抗う間もなく殺される!! どうかして、逃げる方法を探さないと——

「キミにますます興味が湧いた。亡命が円滑に進むよう、僕の推薦状も付けよう」

「……は?」

「我々ならキミを正しく評価できる。帝国に来る気があるなら、闇夜に紛れて南門に来てくれ」

コトン、と何かが置かれる音がしたと思ったら、背後から人の気配が消えた。

ゆっくりと振り向いて見ても、誰もいない。

「これは……?」

床の上に、表面が削られた丸い魔石が落ちていた。先ほどまではなかったものだ。

これって、映像を撮るために加工された魔石だよな? 背後にいた男が、置いていったのか? 再生、してみるか。

魔石に念を込めると、中に映像が映し出される。

そこで俺が目にしたものは……

「はっはっは! 閣下のご威光に乾杯!」

「ははは、乾杯。それにしても、あの平民上がりの鑑定士をこき使って得られた利益は莫大なものだよ。いやはや、さすがはアンメリザくん。平民の使い方が分かっているねえ」

「平民は搾れるだけ搾れ。私は閣下のお言葉を実行しただけですから」

「くははは。あの平民がいつ死ぬか見ものだな。どうだ、ひとつ賭けでも？」

「いえいえ、常に120%で働かせていますが、最低限の手加減はしているのでそうそう死ぬことはないかと」

「なるほど、ギリギリの見極め、と言ったところか。いやあ、アンメリザくんは実に優秀だ」

……下品な笑い声を上げながら酒盛りをするクソ上司と、馬鹿な上級者貴族の姿だった。

☆☆☆☆

「このヤベールの街ともお別れ。それがいいよな？」

誰に聞いかけるでもなくそう呟いて、俺は街道の暗闇の中をゆつくりと歩いていく。

誰もが寝静まるこんな夜遅くでも、いくつかぼんやりと明かりが漏れている建物がある。大抵は貴族様が通う酒場か、そうでなければ大量のノルマを押しつけられた平民の仕事場だ。どんな人が何をさせられているのかも知らないが、過労による目眩や頭痛と戦いながら仕事しているのは間違いないだろう。

「えーっと。冒険者ギルドがこっちで、クソ上司の豪邸があっち、大通りが一本隣だから、南門はこっちだな……たぶん」

仕事以外のことで倉庫の外に出るのも、ずいぶんと久しぶりだと思う。街のどこをとつても、たいした思い出があるわけでもない。むしろ、思い出したくもないことの方が多すぎる。

「道に迷う心配はあるけど、指定されたのが真夜中でよかったのかもな」

——この街をまじまじと見ずに済むから。

そう思いながら、両手に「はー」と息を吹きかけて、誰もいない道を歩く。

産まれ育ったこの街を離れて、俺は本当に生きていけるのか？ 突然現れたあの軍人の

言葉は、俺を騙すための嘘なんじゃないのか？

そう思っっては立ち止まって、倉庫の方を振り向いて……苦笑いと共に歩きます。

「あのまま鑑定品の山に埋もれていても、死ぬだけだからな」

藁だろうが、蜘蛛の糸だろうが、掴めるものがあるのなら死ぬ前に掴んでみたい。

俺の苦労を酒の肴に「くははは」と笑っていたクソ上司や上級貴族と、突然現れた敵国の軍人。どちらを信用するのかと聞かれれば、間違いなく後者だ。

南門から少しだけ離れた場所で、巨大な壁を見上げながら周囲に魔力を流していく。

鑑定魔法の結果、雑草が生い茂る林の中に何者かがいると分かった。そこに向かって歩くと、大きな木の陰から、商人の格好をした男が姿を見せる。

「すみません。お待たせしました」

「いや、時間も指定せずに呼び出したのはこちらだ。来てくれて嬉しく思う」
 そう言つて男はこちらに手を差し出した。俺は素直に握り返して、笑つてみせる。
 聞き覚えのある声だった。どうやら彼が、俺を誘つてくれた敵国の軍人らしい。

「いろいろとキミに聞きたいことはあるんだが、それはヤベールの街を脱出しながらしよう。僕の後に付いてきてくれないか？」

「分かりました」

俺としてもその方がいい。この街にいと、誰かに捕まえられてあの倉庫に連れ戻されそうな気がして、どうにも落ち着かない。

男のあとに続いて歩いて行くと、不意に彼が立ち止まり、落ち葉の積もった地面に手をかざした。

男の手に魔力が集まり、何もなかった場所に地下へ続く階段が姿を見せる。

「行こうか」

「……はい」

ここまで来て、今更帰るなんていう選択肢はないだろう。

先の見えない地下を下りていく。男が手のひらに光の球を浮かべると、入口がひとりりで閉じた。

彼はこちらを振り返つて口を開く。

「名前はアルトで間違いはないな？ 年齢は二十四歳。身寄りはなく、親しい友人もない。職業はアンメリザ男爵に仕える鑑定士——いや、今はグラウス帝国への亡命希望者か」

「……よくご存じですね」

「キミには申し訳ないと思つたんだが、調べさせてもらった。それが僕の仕事だからね」
 潜入の技術がレベル40の彼からすれば、そのくらいいたいた手間でもないだろう。

「それでなんだが。キミは僕の名前を知っているか？ いや、知っているな？」

「……ええ、鑑定しましたから。アルズ・ベラルト少佐、ですよね？」

「ああ。その通りだよ。そしてその名前は、本国であるグラウス帝国の人間しか知らない本当の名だ。潜入中に使っている名前もあるが、キミにそつちを教える必要はなさそうだな」

ベラルト少佐の雰囲気がかう限り、怒っているわけではないらしい。

亡命希望者を相手にドラマド王国の情報収集をしている。もしくは俺個人に面接をしている、と言つたところか？

「次の質問だ。南門の側で隠れていた僕の位置を、キミは瞬時に見破つていたな。差し支えなければ、その手法を教えてはもらえないか？」

「え？ えーっと、見破った、ですか？ 俺はただ、鑑定結果が見えた方向に向かっただけですよ。隠れている場所を見破ったわけではないですね」

そう答えたら、少佐の足が止まった。振り向いた顔が、なぜか驚いているように見える。俺、何か変なことを言ったか？

「なるほど……キミのことは入念に調べたつもりだったが、表層すら見えていなかったらしい」

「え……？」

どういう意味だ？

身寄りのない二十四歳の鑑定士。その言葉に、俺の全てが詰まっていると思うのだが……

「回りとどい問答はやめよう。一番重要なことを聞かせてもらいたい。キミの鑑定魔法^{マジック}では、何ができるのかな？」

「鑑定で何が、ですか？」

鑑定でできること……何かを鑑定する、それ以外にないよな？

……質問の意図が読めない。

俺の困惑を察知したのか、ベラルト少佐は再び口を開いた。

「——いや、質問を変えよう。僕に鑑定魔法を使用した。そう言っていたね？ その結果

を教えてください。可能だろうか？」

「ええ、もちろんいいですよ。口頭では大変なので、何か書くものを借りられますか？」

「これでいいかな？」

「ありがとうございます」

最低限の荷物しか持ってこなかったからな。少佐が紙とペンを持っていて助かった。

少佐に魔力を流して、先ほどより深く鑑定を施す。それを書き写して……

「できました。ベラルト少佐の鑑定結果です」

「ありがとうございます」

思えば、人間の鑑定結果を誰かに見せるのはずいぶんと久しぶりだ。昔、上司が見せろと言うから紙に詳しく書いて見せたのに、「適当なことを書くな！」と激怒されたっけ。それ以来、物品にしても最低限の品質しか報告しないようにした。

少佐も、激怒までは行かずとも、気分を害さなければいいのだが……

彼は紙をまじまじと見て、訝しげに尋ねてくる。

「申し訳ないが、ここに書いてあることについて説明してもらえないか？」

「え？ あつ、すみません。もちろんです」

初めて結果を見せる相手になら、説明も必要か。

俺は紙に書いてある項目を指差しながら、順に話す。

「上から順番に、【名前】と年齢、現在の【状態】と【能力値】。その下にあるのは、これまでに積み上げてきた【技術】。最後に【素質】、つまりその人が持つ才能のようなものが書いてあります」

もう少し深く鑑定すれば、奴隷にした時の価値やこれまでの経歴なんかも見られるが、本人が知っても仕方がないため見ていないし、書いてもない。

ベラルト少佐は【素質】の欄を見ながら言う。

「剣術より弓術の方がランクが高いね……つまり僕は、剣術を学ぶよりも弓術を学んだ方がいい。そういうことかな？」

「いえ。確かにそのような鑑定結果が出てはいますが、ゼロから始めるならどっちがいいか。その程度です。素質よりも、努力した時間の方がはるかに重要ですから」

「……なるほど。ゼロから始めるなら、か——もしかするとキミは、女王陛下の側に立つべき人物なのかもしれないね」

「え……？」

少佐が小さく笑った？

「いや、こちらの話だよ」

少佐はそう言つて、自分の鑑定結果を見ながらゆつくりと歩き始めた。

考えを巡らせているようなその横顔に何も言えなくて、俺は少佐の後ろを静かに付いて

いった。

そうして、十分ほど歩いただろうか？

階段を上がつて通路を抜け、たどり着いた先に見えたのは、丸太を積み上げたような小さな家。

「本格的な移動は明日からにしよう。夜も遅いしね」

ベラルト少佐は大きく伸びをして、凝り固まったらしい肩を回しながら楽しそうに笑った。

どうやらここは、ヤベールの街から少し離れたところにある森の中であるようだった。外壁の張り出しから放たれる光が、木々の向こうにぼんやりと見えている。

背後にあった通路の出口は、入口と同じようにいつの間にか消え去っていた。

「この家は？」

「僕たちの隠れ家だよ。ちよつと準備してくるから、そこに座っていてくれ」

「分かりました」

家の中へ入っていくベラルト少佐を見届けたあと、近くにあった切り株のような椅子に座つて、ほつと息を吐く。

空を見上げると、無数の星が静かに輝き、二つの月が俺を優しく照らしてくれていた。

——ゆつくりと空を見るなんて、いったい何年ぶりだろうか？ 木々の揺れる音や木の葉

の擦れ合う音が、今は心地好く感じる。

ほんやりとしていると、ベラルト少佐が戻ってきて対面の椅子に座った。

「寝る前に酒を飲みながら話でも……と思っただが、あいにくとココアしかなくてね」

「あつ、いえ、すみません。いただきます」

受け取ったカップにゆつくりと口を付け、はあ……と白くなる息を空に吐き出す。

ベラルト少佐は俺たちの間にある焚き火台に薪をくべ、魔法で火を付けた。

「個人的な質問で申し訳ないんだが、キミはどうして鑑定士に？」

「……」

俺が鑑定士になった理由、か……

「これも、亡命に関わる質問、ですよね？」

「いや、僕の個人的な関心で深い意味はないよ。だから、答えたくなければ無理に答えなくてもいい」

「いえ、そういうわけではないのですが……」

明確な理由なんてないし、何より、面白い話じゃない。

「それしか生き残る道がなかった。ただ、それだけです……詳しく、聞きますか？」

「ああ。キミが辛くないのであれば、聞かせてもらおうよ」

「分かりました」

胸の中に溜まっていた何かを吐き出すように、ふう……とため息を吐いて、ココアが入ったカップを傾ける。

バチバチとはぜる焚き火を眺めながら、小さく笑ってみせた。

「うちの王国じゃよくある話です。平民の両親が早くに死んで子供だった俺だけが残され、家を追い出されて道の上で寝起きをする生活が始まりました。同じ境遇の子供たちと固まり、物乞いものごの生活まがを続けていましたが、ある日突然、貴族様の兵に捕まって『鑑定魔法を覚えた者には、飯をやるよ』と言われました。三日で覚えられなかった者は、どこかに連れていかれて。なんとか俺や他の何人かの子供たちが覚えましたが、それからは鑑定の仕事しごとをこなす日々の始まりですね」

毎日のようにノルマが増えて、人が倒れる。人が倒れて、またノルマが増える。

「俺らの命なんて、本当に使い捨てです。自分自身の鑑定はできないから実際のところは分からないのですが、俺には鑑定かんていの才能があったのでしょ。気が付けば、俺一人だけが生き残っていた」

最後の最後まで、人が補充ほじゅうされることはなかった。

家族との思い出なんてもはや残っていない。

あの壁の向こうにあるのは、辛い日々の記憶だけ。

「でも、最後にいい思い出ができたみたいです。俺を認めてくれる人と出会えました」

最初こそ冗談かと疑っていたが、ひとときの笑いのために地下通路なんて用意するはずがない。

この人は本当に、俺のことが必要だと思ってくれたのだろう。

「僕が責任を持って、グラウス帝国にたどり着けるよう手配するよ。必ず」

軽く空を見上げたベラルト少佐は、外ばかりを照らす櫓を睨みつけているように見えた。

1 実力主義の国

「あんちゃん、起きんくていいがけ？ 帝都に入るがよ？」

「ん……？」

ほんやりと開けた視界の先に見えたのは、雲一つない青空。

不意に頭上から影が射した。俺の乗る荷馬車が、バカみたいにデカイ石門を通り抜けたのだ。

「グラウス帝国によく来たちゃあ。歓迎するがいね」

御者台に座る老夫婦が、楽しそうに笑っていた。

突然ヤベールの街の倉庫に現れた帝国軍人——ベラルト少佐の案内で母国を捨てて、今日で十日。

彼の案内で帝都行きの馬車に乗せられ、ほんやりと揺られる旅も、もう少しで終わりらしい。

なお、少佐はまだやることがあるらしく、ヤベールの街に戻っていった。

「帝都・カリソルム名物、城えび饅頭！ 一個二百エンだ！！」

「お兄さん、お土産に光るイカの沖漬けはどう？ 安くしとくよー！」

「新鮮、とれたて、きときと！！ 海鮮丼を食うなら、俺んとこつきゃねえ！！」

威勢のいい声に、陽気な足音。街全体が、温かい空気をまもっているように見える。

「いい国ですね」

俺がポツリと言うと、老夫婦が軽く振り向いた。

「おん？ そうけ？ おらっちは帝国しか知らんがで、分からんですちや」

「か、だらないがけ！ 女王陛下とタテレ山が守ってくれとるからやが！」

「せやったあ。いい国なんは、シユプル女王様とタテレ山の神さんのおがけですちや」

「……なるほどです」

相乗りさせてもらった老夫婦の言葉はなんとなくしか理解できないが、祖国への愛は伝わってくる。

石畳は綺麗に整っているし、浮浪児の姿もない。そして何よりも、住民たちが心から笑っているように見える。

——俺の知る国と違う。俺が捨ててきたヤベールの街とは、何かが違う。

大きく息を吸い込んでみる。

磯の香りと人々の笑い声が混じった、知らない土地の匂いがした。

俺は馬車から降りて、老夫婦に頭を下げる。

「乗せてくれてありがとうございます。また会えることを」

「あんちゃんも元気にな」

「みかん、もってきんしゃい」

「ありがとうございます」

少佐の紹介だからと無償で乗せてもらったのに、なぜかお土産までもらってしまった。

彼らはこれから、武器の買い付けをしようと言っていた。うまく行くことを祈るよ。

「それにしても、こんなに寝たのは、何年ぶりだろうな」

鑑定のことを忘れて眠れるなんて本当に久しぶりだ。ゆつくりと眠ったおかげか、生まれ変わった気さえる。

まあ、早いとこ仕事を見つけないと。このままじゃ飢え死にしてみよう。

『キミならどこでも雇ってくれるよ』

別れ際にベラルト少佐はそう言ってくれたが、正直不安だ。

右も左も知らない土地で頼りになりそうなのは、少佐の紹介状だけなのだが……

【職業】帝国軍士官・5/11(少佐)

鑑定によると彼の階級は十一段ある中の五段目。帝国軍の階級制度には詳しくないが、下から数えた方が早い数字だ。

門前払いを回避するための書類……どうにも、そんなイメージしか湧いてこないな。

「でもまあこれを見せたら一応話だけは聞いてもらえそうだし、『当たって砕ける』を何回もやるよりはいいか」

そう思い直して、周囲に目を向ける。

軍人である少佐に拾ってもらってグラウス帝国に来られたのだから、最初は軍に関連する場所に向かうべきだろう。

『もし興味があるなら、赤い鐘がある白い建物に行ってくれ。軍の訓練校だ』

少佐からはそう聞かされたっけ。彼は俺に、軍人になってほしいようだった。

「赤い……あ……これ、だよな？ 思ったよりデカいな……」

探すまでもなく目の前にあつた。巨大な壁の奥に白い建物があつて、赤い鐘が見えてい

る。訓練校にしては閑散かんさんとしているけど、少佐に教えてもらった特徴とくちょうと同じだ。そもそもあの老夫婦も少佐の紹介だからな。氣を利かせて訓練所の前に下ろしてくれただろう。

「軍の試験に落ちたら、次は商人ギルドに行ってみるか。みんながあの老夫婦みたいに優しいとは思わないけど、他にあてもないし」

それでも、軍よりは商人ギルドの方が雇ってもらえる可能性は高いだろう。腕うでつぶしや戦闘力とは無縁むえんの生活だった。試験に合格できるとは思えないが、義理は果たすべきだよな……

そう思いながら、入口を目指して歩いていく。

入口の脇わきには、分厚い鎧よろいと鋭い槍やりを持った兵士がいた。訓練校と聞いていたが、物々しい装備そうびだ。

「生まれ！ 何者だ!？」

門番は全員で五人。そのうちの一人が、槍を突きつけながら問いただしてきた。

「ベラルト少佐の紹介で訪れた者です。こちらを見ていただいたてもよろしいでしょうか?」

「む? ベラルト少佐の? ……貸してみろ」

紹介状を差し出すと、控ひかえていた門番の一人が受け取って読み始めた。

残る四人の男たちは槍を片手に移動し、俺の周囲を固める。

——下手へたに動けば刺すぞ。

射抜いぬくような視線が、そう言っているように見える。

やがて、紹介状を読んでいた門番が眉まゆをひそめて独り言ひとりごとを呟いた。

「優秀な人材? ベラルト少佐より優れた将になる? こんな手羽先てうばさきのような腕の男が?」

『将』つてのは、軍を指揮する存在だったよな?」

いや、ないだろ!? ベラルト少佐は何を思っただんなことぞ!?

「こんな骨と皮しかないような男を将だなんて、少佐は何を言っておられるのやら……」
うん、俺もそう思う——それにしても、こうして蔑あはまれる感覚はなんか久しぶりだな。

ドラマド王国を捨ててまだ十日やそこらだけど、懐かしいというか、なんとというか……

「貴様! なんだその顔は!!」

突然、門番が俺を睨にらんで大声を上げた。

「え……? いっ、いえ! なんでもないです! 申し訳ありません!!」

懐かしさのせいでもうにも気が緩ゆるんで、とほけた顔になっていたらしい。

慌あわてて謝あやまったが、逆にそれが彼の氣を悪くしたようだった。

門番は紹介状をグシャリと握り潰つぶす。

「偽いつはりの紹介状だな」

「え?」

「これはベラルト少佐の文ではない！」

苛立たしげに叫び、丸めた紹介状を投げ捨てる。

「転がっていく紹介状を目で追うよりも先に、門番の男が俺の胸ぐらを掴み上げる。」

「今なら見なかったことにしてやる！ 貴様の相手をしているほど、我々は暇では——」

「そこまでだ、キジェン上等兵！」

いきなり、訓練校の入口の方向から男の怒号が飛んできた。

声に続いて男が現れ、門番たちを睨みつける。

「キジェン上等兵はただちに腕を放し、他の者は脇に待機せよ！ これは命令である！」

「「「はっ！！」」」

門番たちは飛び上がるように道を空け、握り拳を胸に当てて直立した。

男はゆっくりとこちらに歩み寄ってきて、捨てられた紹介状を丁寧に拾い上げる。そして俺のことを指差しながら、門番たちに問いかけた。

「貴様らはこの男の魔力すら感じ取れんのか？」

「魔力、ですか……？」

「常人とはかけ離れた膨大な魔力が彼から漏れ出していることに、なぜ気付かん」

……は？ 膨大な魔力？ そんなものが俺の体から出てるの!? それって大丈夫なのか……？」

か……？」

「なるほど、本人も知らぬわけか。わざとかと思ひやヒヤしたぞ」

門番の上司らしき人物は、俺の顔を見てそう言った。

そして彼は、くしゃくしゃになった紹介状を広げ、視線を走らせる。

「毎日八百回を超える『鑑定魔法』の行使……ゼロからの教育……彼に部下を……なるほど、確かに面白そうだな」

くくくく、と声が漏れている。熊でも殺しそうな笑みだ。

「おっと、失礼。アルトくんだね？」

「はっ、はい！」

姿勢を正して返事したら、男は一転して好青年のような態度になり、手を差し出した。きた。

「僕はルドルフ。君をスカウトしたベラルトと同じ少佐の立場ってことになっているけど、そこはあんまり気にしなくていいよ。まあ何はともあれ、よろしく、期待の新人君」

俺は何が何やら分からないまま、目の前に伸びてきた手を無意識に握り返していた。

☆☆☆☆

ルドルフ少佐に連れられて、訓練校の建物の中へと入っていく。

俺は建物に入る途中に説明されたことを、ルドルフ少佐に確認した。

「つまり軍部で働くには、一ヶ月後に行われる試験に合格する必要がある、ってことですね？」

「そうだね。その認識で間違つてないよ。でもその前に、試したいことがあるんだ」

「試す、ですか？」

「そう。普通の試験じゃ見られそうにない、君の実力が見たいんだよ。その代わりと言つたらなんだけど、宿と食事はこちらで用意する。どうだい、悪くない提案じゃないかな？」

試験まで時間があるから、その間に別の試験をする……つてことか。

ちよつと変だが、寝床と飯がもらえるなら願ったり叶ったりだ。寝るのは橋の下でいいが、飯はどうしようもないからな。他にあてがあるわけでもないし、断る理由はない。

「よろしくお願いします」

「うん、いい答えだ。早速だけど、もう少しだけ威厳が出るような服に着替えようか」

「着替え、ですか……？」

ルドルフ少佐に連れられて、更衣室らしき場所へと足を踏み入れる。

言われるがまま高そうな服を手にとって、着替えさせられた。

そのあと訓練校を出て、敷地の一番奥まで連れていかれる。

大小様々な建物を抜けた先に、宿舍のようなものが三棟建つていた。その中には小さな

机や椅子、建物の周りには子供が喜びそうな遊具もある。

「……あれは？」

「軍の保護施設だよ。様々な事情で飯が食えなくなった子供たちにごはんを食べさせて、訓練が受けられる年齢まで育てる。そんな施設だね」

「へえ、帝国にはそんな場所が……」

帝国に来てから浮浪児を見ないとは思っていたが、その理由はこれか。

飢えた子供をここに閉じ込めて……といった雰囲気でもなさそうだな。

「街の人たちからすると、この中の誰かが自分の子や孫を守ってくれるかもしれない。僕ら軍人にとつては、未来の部下や上司。保護施設で暮らしているのはそんな存在だよ」

なるほどね。誰にとつてもいい場所つてことか。

まあ、反対者がゼロなんてことはないだろうけどな。

「それでね。君には子供たちの『年長組』の誰か一人を部下にして、優秀な軍人に育ててほしいんだ。それが試験だよ」

「……………え？」

部下にして、育てる？ 俺が？

「君は『鑑定の魔法』が得意なんだよね？」

「……………ええ、まあ。人並みには使えますね」

「その力を存分に活かして、彼らを見てみるといい。面白い結果を期待しているよ」
 ルドルフ少佐はそう言って笑っているが、意図が読めない。

とりあえずは、この街にいる鑑定士よりも子供たちをより深く見ろ、ってことでもいいのか？ そのあとの育てろ、というのは鑑定士の領分を超えていそうだが……

まあでも、俺の今やるべきことが鑑定なのは分かった。

「分かりました。早速始めても？」

「もちろん。年長組はこの建物だよ。僕と一緒に好きに見て回っていいからね」
 少佐に促され、一棟の建物の中へと入っていく。

一階部分は、大きな運動場になっていた。

——よい、はじめ！

そんな掛け声にあわせて、子供たちが次々と走っている。

意外と体格の大きな子も多い。それどころか、俺よりも頼りになりそうな子もいる。
 年長組とは聞いていたが……子供以上、大人未満、そんな感じだな。

「ここにいるのは、十五歳くらいですか？」

「その通り。卒業間近。あと一年もすれば、君や僕と同僚になる子供たちだ」

改めて子供たちを見る。

種族は人間だけじゃないな。獣人がいる。牛や羊のような角がある子、猫の耳を持つ子。

「一番体が大きな子は、巨人族とのハーフだろうか？」

『実力主義で、産まれは気にしない』

ベラルト少佐の言葉は、嘘じゃなかったらしい。

ともかく、鑑定して各人の素質を見てみるか。

【名前】ラルフ（15歳）

【素質】近接戦闘…C 速度強化…C

【名前】ルーレスト（15歳）

【素質】肉体強化…B

【名前】カリナ（15歳）

【素質】弓技…B

【名前】ゴルタルス（15歳）
 【素質】近接魔法…A

高い技術を持つ子はまだいないが、優秀な素質を秘めた子は何人もいる。楽しそうに周囲を見ていたルドルフ少佐が、俺の方に近付いてきた。

「全員を一度集めるかい？ それとも一人ずつ呼び出した方がいいかな？」

「あつ、いえ。このままで大丈夫ですよ。もう、終わりますから」

「終わる？ ……鑑定がかい!？」

「え？ 勝手に始めたらまずかったですか!？」

「……いや、そんなことはないよ。気にしないでくれ」

よく分からないが、このまま続けていいようだ。

一人を選べ、つてことは、深くまで見る子は、ある程度絞ってからでいいんだよね？ とりあえず、薄く、広く魔力を伸ばして鑑定していくか。

【名前】ゲルビン（15歳）
 【素質】銃術槍術…A

【名前】サーラ（15歳）

【素質】剣技…S

将来有望なのは、今見た子たちだな。特に、剣技Sの素質を持つサーラは別格だ。最も優れた子を一人選べと言われたら、間違いなく彼女を指名するだろう。

「ただどそれは、みんなが分かっていることだと思う。」

「先頭を走っている赤い髪のサーラって子。優秀そうですね」

「……そうだね。保護施設が始まって以来の天才だと、担当者が言っていたよ」

「そうですか」

「だとしたら、俺が選ぶべきは彼女じゃないな。」

段々と求められていることが分かってきた。俺に与えられた試験は、隠れた才能を持つ人材を見つけ出して育てること。すでに優秀な人物を選んでも、高評価にはならないと

思う。

——そんな中、俺は一人の少女に目を留めた。

【名前】リリ（15歳）

【素質】支援魔法：S 杖術：C

頭に羊の角が生えている女の子。走るのが苦手なようで、一人だけみんなに置いていかれている。

「ほら、リリ！ 周回遅れだよ！」

「はあ、はあ、はあ、ごめんな、さい……」

「このままじゃ、留年だからね！ 分かっている!？」

「はっ、はい……ごめんなさい……」

本人には申し訳ないけど、今の俺には打ってつけの人材かもしれない。

一応、ルドルフ少佐に尋ねておいた方が無難だろう。

「少佐。優秀な軍人に育てると言うのは、身体能力に限った話ではありませんよね？」

「ん？ あー、そうだね。軍にとつて優秀であればどんな形でもいいよ。もう見つかったのかい？」

「はい。あの周回遅れの子がいいと思うんです」

「っ!!」

ルドルフ少佐は思わず、と言った様子で振り向き、俺の顔と少女を見比べる。

一方、リリという少女は教官らしき女性から叱咤されていた。

「リリ！ あとはアナタだけよ！ しつかり走りなさい！」

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

どうやら他の子はみんなゴールしたらしく、彼女一人だけが苦しそうに走っている。

その姿だけを見るとどうにも頼りなく見えるけど、鑑定は嘘をつかないからな。

「本気で言っているのかい？ 申し訳ないが、僕には可愛らしい羊族の少女にしか見えな
いが」

「もし彼女を優秀な人材だと証明できれば、合格になりますか？」

「……そうだね。彼女なら誰からも文句は出ないよ」

だったら、決まりかな。あとは本人が了承してくれるかだけど、そこはルドルフ少佐に任せたいと思う。そのために付いてきてくれたんだろうし。

「お願いできますか？」

「分かったよ。サンザイ先生。十分の休憩を与えたあとに、みんなを集めてもらっていますか？」



サンザイ先生と呼ばれた教官の女性は、ルドルフ少佐の方を振り向いて敬礼で応えた。
「かしこまりました——現時刻をもって休憩とします！ 各自、十分後にこの場での整列を！」

「「はい」」

へえ、幼い顔立ちを除けば、立派な軍人に見えるな——なんて思っていると、数人の子供たちだけが壁際に走っていった。その中には、最後にゴールしたりりの姿もある。

「あー、疲れたあ。まじしんど……」

「お前、死にかけてんなあ。水、取ってきてやろうか？」

「悪いけどよろしく。あー、ブドウジュースまであと三秒だったんだけどなあ」

「立ち組に入らないだけマシだろ？」

他の子供たちが思い思いに体を休める中で、彼女たちはそのまま壁際に立ち続けていた。水だけはもらえているみたいだけど、どうにも辛そうに見える。

「ルドルフ少佐、あれは？」

「時間内に完走できなかった子供たちだね。そっちでクッキーを食べているのが上位に入った子だよ」

「……なるほど」

一、クッキーとジュース。二、ジュースのみ。三、水のみ。四、壁際に立つ。そんな順

番か。

速くゴールした者には褒美を、遅い者には罰を。少なからず思うところはあるけど、実力主義なのは間違いないのだから。

下位グループばかりを気にかけてしまうのは、俺が似たようなグループに所属していたからかな。

「徹底していませんね」

「僕個人としては、ご褒美だけでいいと思うんだけどね。周囲への分かりやすさも求められてさ」

なるほど。実力主義をかかげる国の弊害ってところか……

でもまあ、結果を残せば上にいけるって考えれば、母国よりよっぽどいい。

向こうじゃ、平民は死ぬまで壁際に立たされて貴族はクッキーだからな。

「ニワトリ組！ 番号！」

「一」

「二」

「三」

休憩が終わり、子供達がキビキビと点呼をしていく。

「全員揃っていますね。ルドルフ少佐よりお言葉をたまわる！」

どうやら準備が終わったらしい。

「アルト君、行くよ。できるだけ堂々としていてくれ。いいね？」

え!? 俺も子供達の前に行くの!?

……という言葉を無理やり心の中に押し込めて、頷いて見せた。

正直な話、嫌というか、場違い感がハンパじゃない。とはいえ拒否できる感じでもないよな？

「ねえ、見て。あれって幹部候補生の制服だよな？」

「すげえ、エリート様じゃん！」

「でも、筋肉ないよ？ 弱そうだよ？」

「それは、まあ確かに……でも、エリート様だぜ？ たぶん……」

子供たちが俺を見てざわついている。エリートってなんの話だ？

幹部候補生の制服？ ——もしかして、俺が着ているこの服か!?

「アルト君、もう少し堂々と。いいね？」

「……分かりました」

ルドルフ少佐の口元が緩んでいるように見える。

どうしてそうなった？ 何かの作戦か？

ルドルフ少佐は、そわそわしている子供たちに向かって口を開く。